

---

# フェアリーテイル 神の滅竜魔導士

神浄討魔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

フェアリーテイル 神の滅竜魔導士

### 【Nコード】

N8326Y

### 【作者名】

神浄討魔

### 【あらすじ】

リアルで死んでしまった少年が名前を変え、姿を変え、そして火、水、風、土、雷、氷、毒、天、光、闇等を操る滅竜魔導士になってフェアリーテイルに蘇る。そして、おなじみのキャラと大暴れします。 多分…

## オリジナル主人公紹介

名前

ディオス・ドラグニル

名称

ディオス

年齢

16歳

性別

男

好きなもの

ギルドの仲間

嫌いなもの

ギルドの仲間を傷つける者

(特に女子供を傷つける奴は絶対に許さない)

魔法

## 神の滅竜魔法

火、水、風、土、氷、雷、毒、天、光、闇

などいろいろな元素を操る最強の滅竜魔導士。

## ブローグ

起き…

「んー…」

起きて…

「むにゃ…もうちょっと寝かして…」

起きなさい！

バチコーン！

「へあっ！？」

オレは何者かに叩かれて起き上った。

「あれ…？オレは…ここは…どこだ？」

オレは今、真っ暗闇の中に横になっていた。

「もうやっとなってきたのね！」

とすぐ横に小さな子供…らしき者がいた。

背中には羽が生えている。

なるほど、これは夢の中なんだと思い、もうひと眠り

しようと目を瞑った時、また叩かれた。

「痛いなあ…人の頭を太鼓みたいに叩かないでよ…」

少し涙目になりながら反論する。

「まったく、死人が寝るなんて聞いたことないわよ…」

はいはい…好きなだけおっしゃって…って、え？

今なんて…言った…オレが…死んだ？

「オ…オレは死んだ…のか？」

目の前にいる羽の生えた少女に聞くと

「そうですよお」

とものすごく呑<sup>のん</sup>気に答えた。

いやいや、そんな呑気に言われても…

その時、頭に痛みが走り、記憶の断片が見えてきた。

く記憶の断片く

11月24日…

オレは普段通りに身支度をし、家を出て

学校へと向かっていた…

通学路の途中、少し行き交う車の量が多い道路がある。

その道も普段通り、普通に歩いていた時…

「きゃーっ!」

突然、悲鳴が聞こえた。

ビックリして声のした方を向くと

小学生くらいの子供が道路にいるのが見えた。

野球をしているのか、どうやら落として道路まで転がった

ボールを取ろうとしているようだが、ここは交通量が少し多い所

車を見て、取るタイミングを計っているようだ。

そして、タイミングよく出てボールのところまで行き

ボールを取って、戻ろうとした時、足を絡ませてこけてしまった。

しかも、運悪く、車が来ており、ブレーキをかけても間に合わない所だった。

その時、オレは自分の意思とは関係なく動いていた。

道路に飛び出し、体当たりをして少年を道路脇まで吹っ飛ばした。

しかし、無情にも車はもうよけられないところまで迫っており

「（やべ・・・）」

と思った時には、視界が一回転した。

チラリと車の影が目映った時、意外と小さく感じた…。

そして…そのまま暗闇へと変わり、オレは地面に叩きつけられる

痛みすら感じないまま、闇へと放り込まれた。

く回想終わりく

そうだ、思い出した…。

縁起でもなく道路に飛び出したバカな少年を助けようと

オレも道路に飛び出たんだ…。

そして、そのまま車に吹っ飛ばされ、命を落とした…。

その時、勝手に口が開いていた。

「…オレが助けた少年…無事だったのかな…」

その問いに答える者がすぐ横にいた。

「ええ、あの子は無事よ。あの後、病院で検査を受けて、通常通り学校に行ったわ」

…そう良かった…って

「おわっ！…！」

オレは後ずさりした。

まさか答える者がいるとは思わなかった。

「うわぁ…ひどいなそんな反応…あんまりだよ…」

少女は泣きだしてしまった。

あ~~~~~…：こついうときなんて言ったらいいかわからない…

ので、適当に声をかけた。

「ごめんごめん！…まさか答えてくれる人いるとは思わなくて…その…」

オレって、やっぱバカか？

「うん！許す！」

許すんかい！

「あ、そういえば自己紹介してなかったね」

そういえば、そうだな。

「私の名前はリリス。見ての通り、天使の一人よ」

そして、羽をピクピクと動かした。

「天使！？初めて見た！」

棒読みで言った。

「エヘヘヘ…」

鈍感なのか何なのか、笑みをこぼしたリリス。

よかった、気づかれてねえ。

そんな時、疑問が浮かんだ。

「じゃあ、リリス、聞きたいんだけどさ」

「ん？なあに？」

やべえ…意外と可愛い…じゃなくて！

「リリースは何でオレを起こしたんだ？」

当たり前の疑問だ。死んだなら、そのまま閻魔の所

行つて、天国か地獄に行く。

オレの場合、地獄かもな…だから、そんなんじゃないくて！

その時、リリースが答えた。

「あゝ。そういうことね。理由は…」

理由は…

「私の暇つぶしよ！」

「（ブツ）」

吹き出した。

「暇つぶしにだれかを蘇らせようと思ってたら、

偶然あなたが来たの。ここにね」

『…』というのはおそらく冥界かなんかだろう。

というか、暇つぶしでそんなことを思いつくアンタがすげえ…

「じゃあ、オレは生き返れるのか？」

期待が少しふくらんだ。

「うん、そうだよ。あ、だけど、現実世界は無理だよ？」

え……なんで……

「だって、あなたの死体はもう燃やされちゃってるもん」

なんですと――――！！？

燃やすの早!?! いや...もしかして...

「オレ…そんなに寝てたの…？」

恐る恐る聞いた。

「うん、現実世界だと1週間くらい」

ガ  
ー  
ー  
ー  
ー  
ー  
ー  
ー  
ン  
！

「って事は何！？オレはそんなに飯食ってなかったのか！？」

「言うとう、そこのー!？」

ツツコまれた。

「寝ばすけだし…食いしん坊だし…大丈夫かなあこの子…」

「ん？何か言った？」

「ううん、何も…」

なんかあやしい…が、それはさておき

本題へ…

「じゃあ、蘇らせるってどういうこと？」

「良い所に気づいてくれましたー！」

キュピーンっとこちらを振り向き指さすリリス。

「つまり、現実世界はもう無理だから、別世界へあなたを

蘇らせることにしたの。あなたの記憶もすべて新しくしてね」

なんですとー！？それはまたまた…

「だから、この中から行きたい世界を選んでね」

とリリスが地面…らしき所をたたくと3つほどの

選択肢のようなものが出た。

『ONE P I A C E』

これはおなじみだ。

『BLEACH』

ふむふむ。

『FAIRYTAIL』

!!???

オレの指はすぐさま『FAIRYTAIL』の文字を押していた。

「選ぶの早っ!?!普通もつと考えない!?!」

リリスにまたツッコまれた。

ツッコまれ役だな。

「フェアリーテイルはオレ、リアルで好きだったんだよ。

漫画も全巻買ったし、アニメも全部見た…」

そつえば、最終回見れなかったな…。

って、待てよ…フェアリーテイルの世界に行けば最終回とか

丸わかりなっちゃうじゃん!というか体験できちゃうじゃん!!

「とりあえず、フェアリーテイルでいいんだね」

「おう!」

「はい、了解。じゃあ、次は名前を決めようか」

と、また地面らしき所を叩いたリリース。

また文字が浮かんできた。

『ライ』

『シュウ』

『ディオス』

迷わずディオスを押した。

「だから、選ぶのは＼」「うるさい」「…」

ツツコみを途中で止めさせた。

「ディオスって、響き良いじゃん。だからコレ」

理由を述べた。

「今から、オレはディオス・ドラグニルだ!」

「え!?!なんでドラグニル付いてんの!?!」

「ナツとオレは兄弟ってことにしたかったから」

「なるほどですね」

おい、口調おかしくなってるぞ。

「では、ナツさんとは双子の兄ってことにしておきましょう」

おお、助かるぜ…。

「顔はナツさんとほとんど同じ、髪形も同じで色は何色がいいですか？」

「黒」

ただ単にブラックが好きなだけ。

「はい、完了!…これ鏡です」

と鏡をくれた。どっから出した!?

鏡の中の自分を見ると、一瞬ナツに見間違えた。

それほどよく似ていた。髪色さえ違わなければ、

ナツと全く一緒だ。

「では、服装なども一緒にしますか？」

「ああ。あ、マフラーの部分は黒いリングみたいのにして。

あとフードの付いてるマントも付けて」

「良いですけど……なぜ？」

「最初は顔をバラさずに、後からバラす作戦だ！」

ふざけた作戦だな……って声までナツと一緒にだ！？

「あ、そう」

...

とその時、服装まで変わった。完璧にナツそっくりだ。

そして後ろにはマントがあつた。そのマントを前まで出し、

完全に体が隠れるようにした。

そしてフードを被ってみた。すると、相手からは

ほとんど口しか見えない様な状態になった。

不審者だな…。

「ところで、魔法は何使えるんだ？」

フェアリーテイルに行くんだっ たら魔法が無きや意味無い。

「はい。神の滅竜魔法を付けました！」

なんですと――――！？

神！？つまり神竜しんりゅうってこと！？

「神竜は火、水、風、土、雷、氷、毒、天、光、闇等の  
さまざまな元素を含みます。なので、ほとんどの魔法は  
あなたにはほとんど効きません」

まさに最強じゃん！

「いいのが、そこまでしてもらって…」

「ええ。いいですよ。では準備はこれくらいでよろしいですかね」

「ああ、ありがとう」

短くお礼を言った。

「どういたしまして。それではいつてらっしゃい、

『フェアリーテイル  
妖精の尻尾』の世界へ！」

リリスが最後に手を振った。

その途端、オレの視界がまた闇に包まれた。

さあ！フェアリーテイルの世界へ出発だ！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8326y/>

---

フェアリーテイル 神の滅竜魔導士

2011年11月24日22時55分発行